
外史に転生した男がいたようです。

下手の横好き

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

外史に転生した男がいたようです。

【Nコード】

N5449N

【作者名】

下手の横好き

【あらすじ】

子供を助けて死んだと思ったら赤ん坊になっていた！外史に転生、主人公はそこで何をしよう。

作者が出来ないのでキャラ崩壊等いろいろやってしまうと思います。不快に思う方はお戻り下さい。それでも読んでやるといふ方どうぞ。

1 (前書き)

初投稿です。下手くそです。
それでも読んで下さる方。感謝。

俺の名前は秋山慶次あきやまけいじ 25歳。

道に飛び出した子供を助けようと道路に飛び出し子供を助けた後、
体に衝撃を受けてたぶん死んだ。

と思ったら、赤ん坊になっていた。

「おぎゃああああああっ！！（なんじゃそりゃああああああっ！！）

「

姓は？、名は徳とく、字は令明れいめい。今の俺の名前です。三国志ですね！分
かります！

馬騰に仕え、馬騰の死後に息子の马超に仕え、その後曹操に仕えた
将。

義に篤く死を前にしても忠義を貫いた忠臣。

猛者揃いの馬騰軍の中でも随一の武を誇り関羽にすら一目置かれる
猛将。

最初こそ戸惑っていたものの二、三ヶ月で慣れ、一年経つ頃には普通に生活していた。

髪や目の事で色々言われたけど無視。

なんか俺白髪なんだよね、しかも金色の目。これなんてイジメ？ほんと“世界は、こんな筈じゃないことばかり”だ。

そして五歳の頃、

「徳よ、お前ももう五つになる。よってこれより修行を始めよう。」

「大丈夫よ。この人と私の子だものきつと大成するわ。」

父よ。俺はまだ五歳だぞ？体だって出来ていない。無理言うな。

そして母よ。何が大丈夫なのか。そんなの根拠もクソもねえよ。

確かに、この体は異様に超高スペックで一日中全力で走ってもほとんど疲れないし、

家に在った訳の解らない漢文の本が数日勉強するだけで理解できたりした。しかし、

「これはないわー。」

初日から子供じゃ出来ないと言うか大人もこなせないんじゃない？って言うぐらいの修行と言う名の地獄でした。

両手足に重り（各手足10kg位）を付け走り込みを始めとした筋

トレ、

その後到底子供が持てないだろうと思われる肉厚の剣で素振り、馬術の訓練さらに最後に父or母との模擬戦。その後は家に帰って数々の兵法書などでの勉強。

父に母よ、あんたら馬鹿じゃね？はつきり言っただけで最早虐待の域だぜ。こなす俺も俺だけだよ。

それから数年経ち、今じゃ両手足の重りは合わせて600kg超、肉厚の剣にも重りが200kg超でも普通に闘える。

って言うかなんでこんな重りあるんだ？おかしいだろっ！

まあ、そんなこんなで最近黄色い布を巻いた賊が頻繁に出現している。

黄巾党だな。分かってたけどほんとにウザイんだこいつら。殺つても、殺つてもぞろぞろ現れる。

え？殺しに忌避感はないのか？そんなのあるに決まってるじゃん。でもね、それも言ってられないんだ。

強盗、略奪、殺人なんでもしやがるんだぜ？殺らなきゃこっちが殺られるわ。

この地には幸いな事に俺や父、母が居たからそれ程被害もなくやつらも減ってきた。そろそろかな？

「父に母よ、俺は旅に出ようと思う。」

「そうか。」

「いってらっしゃい。」

え？それだけ？一人息子ですよ？他になんかないの？

「……………」

ないのね。もういいです。

とぼとぼと部屋に戻り旅支度を整え家を出て家の中の父と母に声を掛ける。

「じゃあ、またいつか。」

「ああ。」

「いってらっしゃい。」

こちらを見ることも無く応える二人。

そのまま見送られる事もなく俺は旅に出た。寂しくなんてないんだからねっ！……………キモッ

1 (後書き)

自分に文才がないことを再確認。でも、書きたいんだ。

2 (前書き)

二話目投稿。やはりこれも皆様のお目汚しになりそう。
それでも読んでくれる方。感謝。

はい、当てもないのに家を飛び出し旅に出た？徳だ。ただいま涼州を彷徨ってるぜ。

さて、どうしようか。

「……………そうだ、馬騰を見てみよう。」

なんて言っただって歴史で？徳は最初馬騰に仕えてたからな。俺はそんな気ないけどどんな奴かだけ見てみよう。

……………馬騰ってどこに居るんだっけ？まあ、商人とかに聞きながら探そう。

馬騰を探して十数日とうとう見つけたのだが、

「……………（ぽかーん）」

前方数十メートル先に馬騰がいる。近くにいた人に聞いたから間違いない。

……………なぜに女？

いや、馬騰は男だろ。隣に居る女は？え？馬超？マジ？馬超も女？

……………まさか！

はっと気をとり直すと馬騰と馬超はもう居なかった。俺がフリーズ

している内に何処かへ行ったらしい。そんな事よりと近くの商人に聞く。

「曹操や孫堅って女？」

「何当たり前の事言ってるんです。まさか知らなかったんですかい？」

マジかい 111 O T L 111

ここまで来ると流石に分かつちまうよ。もう十数年経ってるから記憶は薄れているけど間違いない。

生前にやったエロゲー【恋姫？無双】の真か無印だ。両親が普通だったから全然気付かなかったぜ。

しかし、そうすると死亡フラグ激減じゃね？原作に関わらなければ良いんだし、

関わったとしても主人公がどうにかしてくれるだろう。なら今することは、

「旅を続けて見聞を広めよう。そのついでで出来たらだけど原作キャラを見ればいいや。」

とりあえず原作キャラ「蜀の馬超」は見たな、遠目だけど。次は誰を発見出来るだろうか。

「そうと決まれば旅を再開しますかっ！」

でもその前に、足が欲しいな……………馬！そう馬だ！

旅のお供といえは馬。愛でてよし、乗ってよし、そして何より俺が疲れないのが良い。それに、

涼州は良い馬が多い。俺に目利きは出来ないがそれなりの馬を確保できるだろう。

馬を求めて北へ南へ東へ西へ。どこで会う馬も良い馬なんだがいまいちピンとこない。

もう適当に買ってしまったおうか。そんなことを思っている時に聞こえてきた噂。

『南匈奴の国境付近に悪魔の馬が住んでいる。』

「松 かよっ!!!」

思わず突っ込んでしまった俺は悪くないと思う。

やって来ました国境付近。しかし、数日間行けども行けども馬の姿はおろか動物の気配すらない。

今日も歩き続けるうちに夜も遅くなり野宿の準備をする。近づく者が居れば寝ていても気配で分かるため気にせず大地に横になり眠る。

ゾクッ

「なんだっ!」

いきなり直ぐ近くで大きな気配を感じ飛び起きる。直ぐそばに居る巨大な黒い影。

「（この俺がここまで接近されて気付かなかったただとっ！）」

直ぐに体勢を整える。「花 慶次」を参考にきて来たから武器はない。

巨大な影を見ていて気が付いた。

「（馬？それにしてもなんてでかいんだ。）」

今まで見てきたどの馬よりも大きく、その体には大小様々な傷があった。

体長はざっと見て二メートルは超えている。そして、足が8本……
…8本？……8本！

「スレイプニルかよっ！神獣だよっ！北欧神話かよっ！でるなら穆ほく王八駿おっほっしゅんの

どれかにしろよっ！ここ中国だろっ！！」

思わず突っ込んだpart？をしてしまったがまあいい。それより……惚れたっ！

こんな最高クラスの馬に出会えるなんてもう最高だっ！

「お前さん、俺の馬になってくれないか！俺はお前さんに惚れたっ！頼む！」

馬に頭を下げる。傍から見たら変に見えるかもしれないがそんなの関係ない。

自分の誠意を示すためになら何でもしてやる。

頭を下げてから数刻。徐々に馬が近づいて来ているのが分かるが頭を上げずひたすら待つ。

くいくいっ

袖を引つ張られたので頭を上げると目の前には黒い巨大な馬。つぶらな瞳がかわいいです。
じゃなくて、

「俺の馬になつてくれるのか？」

「ぶるるる」と鳴きながら膝を折る馬。どうやら俺の誠意は伝わったようだ。

恐る恐る背に跨ってみると馬が自然な動作で立ち上がった。

「うおっ！ たっけー！ すっげー！ うわっはー！」

大はしゃぎの俺を背に馬が歩き出し徐々にスピードが上がってくる。

「うおおおおっ！ はえー！ さいこー！」

俺の予想を遥かに超える速度で走る。

「お前さんは最高だっ！ 他の馬じゃこうはいかないっ！ そうだっ！ お前さんの名前は黒帝こくていだっ！ 馬の帝王だっ！ はーっ はっ はっ はっ はっ はっ はっ！」

こうして相棒を得た俺の旅は再会された。ちなみに黒帝は女の子でした。

一番の驚愕、朝起きると………黒帝の足が4本になってた。

村から村へ、街から街へ、路銀や食料が尽きそうになると賊を潰して稼ぐ。

涼州を出て并州に入りうろつろ彷徨うがめばしい物もなく原作キャラとの遭遇もないまま

路銀稼ぎの賊狩りと修行（漫画、ゲームアニメの技）に精を出していた。

最近のお気に入り技はクルダ流交殺法。ダメ元でやってみたら出来た。

そして路銀稼ぎに精を出し過ぎてしまい変な二つ名が付いた。その名も『白鬼』。

確かに白髪ですよ。でも鬼ってなによ鬼って。まあ賊殲滅の時に人間手裏剣とか

圧殺とか素手でクレーター作ったり真空刃をだして切り刻んだりしたけどさ。

.....なんか厨二くさい。

ついでに黒帝には『魔獣』、『悪馬』、『黒き巨獣』等の二つ名が付いた。

并州を抜けて冀州へ。

ここには袁紹、顔良、文醜がいるけどスルーで行く。顔良は好きだけど後の二人はウザそうだから。

ここで特筆する事は、氣を扱えるようになったことだ。

山の中で狩りをしていると変な爺さんに会い、飯をご馳走したら教えてくれた。

なんでも俺には氣を扱う天才的才能があるとか言われて修行を付けてもらい。二週間でマスター。

爺さんが「ワシの数十年の苦勞は……………」とか言って、OTL
こんなになつてた。

礼を言つて分かれた後、

「はっ！よく考えたら涼州には董卓と賈馱が居たじゃないかっ！」

今気付いても涼州は遙か彼方。がっくりと肩を落としてとぼとぼ歩き冀州を後にした。

2 (後書き)

ご都合主義万歳！

やっぱり文才が欲しい作者。

読んでくれた方。感謝。

3 (前書き)

早くも展開に詰まってしまいgood goodに。

やっぱり行き当たりばったりなのはダメなのでしょうが。

今回も駄文です。

それでも読んでくれる方。感謝。

皆、「ザシユツ！」「こんちは、「ドガンツ！」？徳だよ。「ベキイツ！」今、何を
しているか「ゴシャツ！」というと、「グシャツ！」黄巾賊と戦つ
てます。

冀州から？州に入って間も無く、大勢の黄色い布を身に着けている
奴ら（黄巾党）

が街に攻めているのを見かけた。目測で大体三千人くらいだ。こり
ややべえなと思って

いると街の西側から別の集団約二千人くらいが合流しようとしてい
るのが見えた。

今までの奴らで苦戦していた街にこれだけの数が合流すれば陥落は
時間の問題だ。

そう思った時には俺の体が動き奴らの後方から奇襲紛いに突っ込ん
で行っていた。

途中、目の端に旗が見えたけど官軍でも来たかな？

「恐れるものは背を向けろっ！向かって来る者は覚悟して来いっ！」

すでに数を半数に減らした黄巾党の連中に異常な濃度の殺気をぶつ
ける。

近い者は気絶していき、遠い者は圧倒的な死の予感に体を震わせ逃
走する。

そして辺りに俺以外立っている者がいなくなった。

「まあ、二千くらいならこんなもんか。これくらいの雑魚なら万単
位でも多分疲れねえな。」

逃げていく黄巾党を見ながら自分の出鱈目さを実感していた。
その後、黒帝に乗り悠々と街まで行こうとして気付いた。街に翻る
『曹』の旗。

「曹操が居るのか？」

なぜだか無性に嫌な予感がした。本能が行ってはだめだと訴えてくる。

本能に従い踵を返した瞬間、

？「待ちなさいっ！」

街の方から聞こえた声。思わず振り返って目が合ったのは日の光を反射しきらきらと
光る金髪くるくるツインテール。画面越しに見た忘れもしない霸王の姿。

曹操孟徳。

『治世の能臣、乱世の奸雄』または、『清平の奸賊、乱世の英雄』

正史では後漢の丞相・魏王で魏の基礎を作り、後世では魏の武帝と呼ばれた。

しかし、この物語（外史）では霸王ではある前に一人の女の子。
魏ルート最後では、悲しい別れをすることになる。
主人公曰く、寂しがり屋の女の子。……………でもレス。

確実に顔も見られたらろう。目が合ったし。

「はあ、仕方ない。でも、面倒な事になりそうだなあ。」

溜息を吐きつつ黒帝を街に向かって歩くかせた。

街に着くと8人の女性たちに迎えられた。一人を除き警戒心剥き出しで。

黒帝から降りて曹操にネコを被って声を掛ける。

「俺を呼び止めたのはあなたか？」

「……」

え？なに？すげえがん見されてるんですけど（汗）

「呼び止めたのはあなたではないのか？」

「え？え、ええ、私よ。」

なにを焦ってるんだ？顔もほんのり赤いし……風邪か？

「コホンッ！私は曹操、字は孟徳。陳留にて刺史をしているものよ。あなたは？」

あ、咳払いで誤魔化した。

「刺史殿だったかこれは失礼した。私の名は？徳、字は令明。見聞を広げるため各地を放浪しております。」

片膝をつき頭を下げる。

「礼を言わせてもらおう？徳。あなたのおかげで私の大切な将を失う事を」

避けられた。ありがとう。」

「刺史殿に礼を言われるとは恐悦至極。」

「……ふふっ」

「……フッ」

二人で目を合わせニヤリと笑い合い俺は立ち上がる。

「単刀直入に言うわ。？徳、私に仕えなさい。」

は？いきなり何言ってるのこの霸王さま。あんた男嫌いじゃなかったっけ？

？「お待ちください華琳さまっ！」

「なに？夏侯惇、荀？。何か問題がある？」

「大ありですっ！なんでこんな男を配下に加えようとするんですか

っ！」

「そうですねっ！こんな男を華琳さまの傍に居させるわけにはいきませんっ！」

「誰です？」

「将の夏侯惇と軍師の荀？よ。この子たち、男が嫌いなのよ。」

それはあんたもでしょうが。っていつかいつの間に横に来た！

「ああっ華琳さまっ！そんなに近づかれては御身が穢れてしまいますっ！」

早急にお離れくださいっ！」

「貴様っ！いつまで華琳さまの傍に居るっ！さっさと離れんかっ！」

「……………」

さ、流石に酷くない？こうなのは知っていたけど…………俺泣いちゃうよっ。

「初対面の相手にこれはどうよ。」

あまりの暴言に敬語も忘れて曹操に問い掛ける。

「そうっ」「貴様っ！華琳さまになんと言う口を利いているかっ！」

だが曹操が喋ろうとしたのを夏侯惇の大声が遮る。

「はあ、将が初対面の相手を侮辱し、主の言葉を遮り、拳句の果てに公の場で

真名の連呼。曹孟徳殿、あんたの将はどうなってるんだ？」

溜息を吐きつつ言った言葉に答えたのはまた夏侯惇だった。

夏侯惇「華琳さまを侮辱するとは、貴様っ！命がいらんらしいなっ
」！
」

「あのね、その原因が何を言ってるの。」

「もう我慢ならんっ！その首切り落としてくれるっ！」

夏侯惇が我慢の限界を越えとつとつ剣を抜き放った。瞬間、世界が凍った。

「抜いたな。」

目の前の男から発せられる殺気に全員の身体が震え背に冷や汗が流れる。

武官である者たちがこうなのだ軍師の荀？など顔が青褪め呼吸が不規則になっている。

「剣を抜いたな。」

殺気の密度が上がる。荀？は気絶した。

「自分の思う通りにならないから、ただ気に食わないからといって剣を抜くか。」

さらに密度が上がる。最早立っているのは曹操、夏侯惇、青い髪の女性、多数の傷跡を持つ女性だけだ。

「相手の力量も理解せず、直情的になり牙をむく。そんなのはただの獣と同じ、

そのような獣はここで葬ってしまおうか。それとも。」

瞬時に曹操の背後を取り、

「そんな将の手綱も握れない主を始末したほうがいいのかな？」

左腕を抱き締めるように体に回し、右手を首に触れるか触れないかの加減で撫でる。

「（あれ？ここまでやったら普通ツツコミの一つもくるはずなんだけどな）」

この程度の殺気（と自分では思っている。）で動けないなどと露知らず、お頭の中で首を

捻る。絶を突きつけられるくらいは覚悟していたのに。

後で聞いた話ではこの時の俺の顔はお仕置きをする曹操の顔ととても似ていたらしい。

曹操の首を撫でるのをやめ耳に口を近づけ小声で喋る。

「曹操殿。あんたの将は俺があんたに仕えるのが嫌らしいから今日のところはこの辺で。」

縁があつたらまた会おう。今度逢うときに敵でない事を祈ってるよ。可愛い人。」

曹操の頬にキスして離れ、黒帝に乗り走り出す。

なんか途中から人格が変わってたような気がするけど気にしない。
しないったらしない。

恥ずかしい事した気がするけど気にしない。

しないったらしない。

きっと楽しい明日に向かって全速前進っ！

やっぱり気にするっ！！恥ずかしいーっ！！

3 (後書き)

原作キャラどころか自分で作ったキャラすら掴めない。どうすれば

……

読んでくれた方。感謝。

4 (前書き)

なんか考えてた展開から逸れていってしまいます。
なぜこうなったのでしょうか。

今回もgdg 駄文です。

それでも読んでくださる方。感謝。

その後、黒帝で適当に走りまわり恥ずかしさを落ち着かせ、また旅を続けていた。

そして、やってきました？陽らくしやう。漢の都ですな。漢おとこの都じゃないよ？

「おー、でっけー。」

でかい、確かにでかい。が、

「でかいだけで中身が伴ってないな。街に活気がない、笑顔がない、なにより

外に出ている人が少ない。」

街の有様を見る。警備兵であろう鎧を着た兵士が市民に暴力を振るい、別の方向に

目を向けると身分の高そうな男が商人に堂々と賄賂を要求している。

「腐ってるな、これが漢の現状か。……いや、さらに悪くなるか。」

旅の途中耳に入ってきた情報。

黄巾の乱が曹操のによって治められようやくの平穩が訪れた。その矢先の出来事。

霊帝死去。

黄巾の乱によって無能ぶりを存分に発揮してしまった後漢王朝。

その要である霊帝の死去が報じられる。これによって諸侯の動きは活発になるだろう。

「これより群雄割拠の時代の幕開けってか。ん？」

目の端に見るからに怪しい騎馬の群れが逃げるように街から出ていった。

「怪しさ大爆発だな、おい。……気になる、追ってみるか。」

見るところ騎馬が40ほどその中に身分の高そうな身なりをしたのが2人。

2人のうち1人は子供で抱えられている。

「普通子供づれなら馬車ぐらい使うだろ。なんか焦ってるみたいだし、人攫い？」

でもないか、見る限りそれなりに裕福そうだしな。」

よく見ると子供は抵抗してるみたいだ。

「やっぱ人攫いか？とりあえず行ってから考えるか。」

黒帝を走らせ集団に近づくと、途中で黒帝の背で立ち上がり、「何者だ！」とか「近づけさせるな！」言う声は気にせず、

「とっつ！はっ、よっど。ほっ！」

飛び上がって子供を抱えている男に蹴りを入れ子供を掻っ攫う。

男たちが落馬した馬の背を蹴りまた黒帝の背に戻る。
声「とに言つと、」

「とつっ！」「…黒帝の背から飛び上がり、

「はっ、」「…男に蹴りを入れ、

「よつと。」「…子供を搔つ攫い、

「ほっ！」「…馬の背を蹴り黒帝に戻る。

集団がえらく騒いでいるが無視。しばらく黒帝を走らせながら腕の中の子供に声を掛ける。

「よう、暴れてたみたいだったから搔つ攫ってみたけどこの集団何よ？」「

？」「……」

「ん？この体勢じゃキツイか。」「

子供が喋らないのは体勢がキツイせいかと思ひ黒帝を止める。
ついでに子供を正面から見えるよう腕に座るように抱える。

「これで大丈夫だろ。それで？あいつら何よ。人攫い？」「

？」「……そなた何者だ。」「

「俺は？徳。旅の者だ。それで、どうなんだ？」「

？」「……まあよいか。そのようなものだ。あの者どもは……」

子供から聞かされたのは正直「おいおい、勘弁してくれよ。」と言いたくなる
とんでもない事だった。

あの集団は大将軍何進を暗殺した奴らで、袁紹・袁術らに殺害されそうだから

逃走してきた。自分は劉協で途中兄である劉弁は殺されてしまった。

ちなみに劉協は女の子だった。

「あー、うん。なんとなく分かった。で？どうするよ。？陽帰るか？」

説明後口調を丁寧にして話してみたら普段通り良いと言われた。
さらに名で呼んでいいらしい。

「うむ。？陽に帰りたいのは帰りたいのだが。」

「ああ、あれか。」

騎馬の集団が追いついてきたみたいだ。

「ちょっと待ってな、直ぐ片付けてやるよ。」

「しかし、そなた一人では…」

「なに、あの程度肩慣らしにもならんよ。」

協を黒帝に乗せ降り、背中越しに声を掛ける。

「安心しな、必ずおまえを守ってやる。」

その言葉で協の顔は真っ赤に染まっていたが背を向けていたから気付かなかった。

騎馬の集団の前に立ち塞がる。

「おっと、ここからは通行止めだ。通すわけにはいかん。」

「貴様っ！このお方を誰だと思っっているっ！十常侍の張讓さまだぞっ！」

一人の兵士が前に出て声を張り上げる。

「だからどうした？」

「なっ！」

兵士が絶句するが俺は気にせず喋る。

「張讓だろうが誰だろうが知ったことじゃない。通せないものは通せないんだよ。」

「ふん、一人で何ができるっ！やってしまえっ！」

「はっ！」

おそらく張讓であろう身なりのいい男が号令を掛けると
騎馬の集団がたった一人に向けてお襲い掛かる。が、その一人はあ
まりに強すぎた。

十も数えぬうちに40騎の集団は壊滅。兵士は地に伏せ辺りに聞こ
えるは苦痛の声。

「さあ、残りはお前だけだ。張讓。」

「ま、待て、待ってくれ。」

その中を悠然と歩いてくる白髪の人に怯え命乞いをする張讓を冷た
い目で見ながら、

最期の言葉を掛ける。

「靈帝の寵愛をいいことに私腹を肥やし、良識ある官を罷免、殺害。
権力を用い暴政を行い重税を敷き民を貧困に喘がせる。」

「ひい！」

「そのような輩はここいらで舞台から消えるがいい。」

シュパッ……ブシュッ！

ここに張讓は表舞台からも裏舞台からも姿を消した。

「協、終わったぞ。ってどうしたんだ？」

黒帝の所まで戻ると呆けたように見てくる協。

「そなたは強いのだな。」

「まあ、鍛えてるからな。ほんじゃ、？陽に帰るか！」

黒帝に乗りまた協を前に乗せ？陽に向かって歩き出す。と、

？「その馬止まりなさいっ！」

「あん？」

振り返るとそこには、薄紫色の髪をした少女と緑色の髪の子。
メガネツ

うん、覚えがありすぎるね。

薄紫色の髪をした少女 董卓 仲穎

史実では粗暴で知略に優れ、武芸に秀で、腕力が非常に強く、馬上で左右

どちらの手でも弓を引く事ができたとされる。また、相国になった後は

暴虐の限りを尽くし悪逆非道を重ねた。

この外史では可憐な美少女。民のことを考え、民のための政治が出来る人。

緑色の髪の子 賈馱 文和

史実では最初は董卓に仕え、最終的に曹家に仕えている。機知に長ける参謀。

高評価と厳しい評価の両方がある。

この外史では主であり親友でもある董卓LOVEの人。ツンデレ美少女。

一度は諦めた出会いが叶った瞬間だった。

4 (後書き)

やっぱり戦闘描写が書けません。何度書き直しても違和感が出てしまいます。

このままじゃ主人公無双が書けません。鬱になりそうです。

初めて感想が頂けました。

ペペペー様

マイペース様

ありがとうございます。

そして、読んでくれた方。感謝。

5 (前書き)

どうしても構想通りにいきません。

文才のない自身が恨めしい。

かなりの駄文。

それでも読んでくれる方。感謝。

馬を降りてから対面した原作キャラ。念願の出会いで嬉しいけど物凄く警戒

されてるから素直に喜べない？徳です。

？「これはあんたがやったの？」

「ん？ああ、そうだ。」

？「あの鎧は？陽の兵のものだね。どういつことか聞きましょうか。」

「ああ、それは……」

大將軍何進を殺害したのは宦官であること、この兵達は肅清を逃れた張讓の私兵

であること。そして、この少女が劉協であることを説明する。

？「劉協って靈帝の次子の！」

「そうそう。な、協。」

「うむ。余が劉協だ。」

？「皇女殿下で在られましたか。失礼いたしました！」

おお、信じた。どう考えても胡散臭いのに。

まあ、そっちの方が都合がいいけどさ。

「よい。それより、そなたらの名はなんと言う。」

「わたしは姓は董、名は卓、字は仲穎と申します。」

「あたしは姓は賈、名は馭、字は文和と申します。」

「あれ？董卓っていえば涼州の人じゃなかったか？」

知っているけど知らない振りをして董卓に問いかける。

「……そうですが、あなたは？」

「俺は姓は？、名は徳、字は令明。君らと同じ涼州の出だ。」

「ふむ、涼州の董卓がなぜ？陽におるのだ？」

「それはあたしから説明します。」

賈馭の説明によると、黄巾の乱が終結したため内政に取り組んでい
ると

朝廷からの使者が訪れ、？陽に来るよう玉璽印付きの手紙で要請さ
れたらしい。

「印が押してあるなら勅命だ。従うしかないな。」

「むづ。あやつらめ、玉璽を好き勝手使いおつて。」

「しょうがないさ。あいつらはそれだけの事が出来る富と権力が有
つたんだ。」

「ちょ、ちょっと、あんたっ！殿下になんて口利いてるのよっ！」

俺と協のやり取りを見ていた賈馱が声を掛けてくるが、

「ん？あゝこれは……」

ちらりと協の方を見る。

「賈馱よ、余が許しておるのだ。それに？徳は余の命の恩人、礼を強いる

つもりはない。」

「……殿下がよろしいなら。」

渋々と下がる賈馱。

「まあ、災い転じて福となすってこつた。あいつらのやった事は最低の行為で
協も被害を被つた。しかし、そのおかげと言っちゃあなんだが何も
しないのに

これだけの軍を得られるんだ。今はそれを好機と捉えなきゃな。

それに、宮中に味方は必要だろ。」

「味方になりえるのか？」

訝しげな表情の協。今まで人の黒く汚い部分を無数に見てきたのだから人間不信

みたいになるのは仕方ない事かもしれない。

「（その割には俺に対して普通に対応するよな。命の恩人だからかな？）」

そんな事を考え頭を捻りながらも協に対して答えを返す。

「それは協しだいだ。名君たるうとすればおのずから臣下はついて来るし味方も増える。

さらに言えば国も栄える。

しかし、逆に年少と言つ理由で政を丸投げするような暗君であれば臣下は離れ

張譲のような下種の傀儡になり国は衰退していくだろう。

つて俺つては何を語つてるかな。しかも答えになつてないし……」

「いや、なんとなくだが言いたい事は分かった。」

「そっか、なら頑張んな。」

「うむ。」

自然と協の頭を撫でていた。協も満更ではないようで頬を赤くし微笑んでいる。

そうしていると視線を感じたので目を向けると董卓達が所在無さに立っていた。

頭から手を離すと俺と同様に視線に気付いた協は慌てることなく董卓達に近づいた。

「董卓穎。賈文和。」

「は、はい……」

「はっ！」

協「余は今の腐敗した漢王朝を正し、民が安心して暮らせる国にしていきたいのだ。」

余と共に？陽に行き、漢の為尽力してはくれないだろうか。」

その問いに両名は真剣な顔で、

「承りました。」

そう返事して頭を下げた。

こうして協は董卓軍を伴い？陽へと戻って行った。

おまけ

協が董卓と？陽へ帰る事が決まってから、

「じゃあ、協の事よろしく董卓。」

そう言つて黒帝に乗ろうとすると、裾を引かれた。振り返ってみると不安そうに

上目遣いで俺を見る協が居た。

「……………そなたは一緒に行つてくれぬのか？」

「……………」

小さく呟くその姿に驚き無言でいると何を思ったか協が腰の辺りに抱きついてきた。

「そ、そなたが旅をしているのは知っておる。だが……………どうしてもだめか？」

既に目に涙が溜まっているのが見える。

「……………」

「……………」

しばらく見詰め合う。協の目に浮かんだ涙は今にも零れそつだ。

「……………？陽までだからな。」

まあそれほど遠回りするわけでもないしな。

「うむ、では行くか。」

いった途端に涙は引っ込みしたり顔になる協。

ま・さ・か、嘘泣きかよっ！真に迫り過ぎだろっ！全然気付かなかつたぞ。

はあ、と溜息を吐きながら協を見て次にこんな事があっても引つかからないようにしようっと心に誓うのだった。

誓った筈なのに協の二度目の泣き落としに屈してしまい暫く？陽に
留まる事になった。

俺にとって女、子供の涙は凶器だと言うことが分かった。

本日の教訓、女、子供の涙に気を付ける。

5 (後書き)

輝義様

黒いエナメル様

感想ありがとうございました。
読んでくれた方。感謝。

6 (前書き)

ああ、なんて駄文なんでしょう。

時間をかけてもこんなものしか書けない自分に絶望しそうです。

こんな駄文でも読んでくれる方。感謝。

協を助けてから数ヶ月、協の泣き落としによって未だ？陽に逗留している？徳です。

？陽への帰り道、董卓と賈馱の両名とも割と仲良くなり？陽に着いてから城に

誘われた。しかし、それを断り街で暮らしてる。

今の？陽は以前とは見違えるほどに立て直され、街には活気に満ち民たちには

笑顔が溢れている。そんな中、俺は城に呼び出されていた。

広間に通される。そこには董卓軍の主だった将が勢ぞろいしていた。上座に董卓が座り、その横に賈馱。そして、その回りに呂布、張遼、華雄、陳宮。

ちなみに顔見知りには董卓と賈馱のみである。

「よう、久しぶりだな。俺に何かようか？」

数ヶ月ぶりの再会に軽い挨拶をする。

「お久しぶりです。」

「ちょっと！口の利き方に気を付けなさいよ！」

穏やかに挨拶する董卓と俺の言葉遣いに文句を付ける賈馱。そして、自分たちの主に無礼な振る舞いをする俺に対する突き刺さるような視線。

「俺は誰に対してもこんな口の利き方だよ。知ってるだろ？」

旅に出た当初は敬語を多少使っていたが、最近は面倒になったから誰に対してもタメ口だ。

「それは知ってるけど……」

そんな俺に対しブツブツと文句を言ってくる賈馱とそんな賈馱を見て笑っている董卓。

まあ、それは置いといて、

「で？こんな所に呼び出して何の用なんだ？」

改めて賈馱に問う。董卓が俺を呼び出す筈も無いから俺を呼んだのは賈馱だろうと

考えたからだ。

賈馱はこちらを見据え、

「あんたに来てもらったのは他でもないわ。軍に仕官してもらっためよ。」

そんなことを言ってきた。

「んじゃ、さいなら〜。」

言われた瞬間踵を返し後ろに手を振りながら扉に向かって歩き出す俺。

「ちょっと！待ちなさいよっ！」

「あん？なぜ俺がそんな事しなけりゃならん。」

賈馱の制止の声に振り向き問う。

「お前らだけで十分だろう。天下の飛將軍、呂布奉先とその軍師の陳宮公台。

神速の張遼文遠。勇猛果敢な華雄。そして、神算鬼謀の賈馱文和。これだけいればある程度の事は出来るだろう？」

「それがそうとも言い切れないからあんたを呼んだんじゃない。」

いらいらしたように話す賈馱。

「なんか、あつたのか。」

「袁紹が諸侯に檄文を送りつけたのよっ！」

「檄文？」

「ええ。『董卓が皇帝を傀儡にして朝廷内を牛耳り暴政をしている。世を正すため

力を持つ英雄たちよ今こそ悪逆董卓を打ち倒すため立ち上がるべし』という内容よ。

なにが世を正すためよっ！自分が権力を握れなかった腹いせでしょっ！」

なるほど反董卓連合か。憤っている賈馱を見ながらそんなことを考える。

「だから、これのおかげで数多くの諸侯が攻め寄せてくるわ。そん

なことになったら

これだけの将じゃ足りないの。一人でも有能な人材が必要なのよ。」

賈馱の言葉にフムフムと頷き、

「それでなぜ俺なんだ？ただの風来坊だぜ？」

「あなたの事は陛下からよく聞いています。自分を攫った張議の手の者40余りを

瞬く間に倒してしまっただとか。」

董卓がふんわりと微笑みながら話す。

「それは事実だけだよ。ちっ、協のやつ余計な事言いやがって……」
頭を掻きながら愚痴る。

「それにこれは陛下からの推薦でもあるんです。」

「あん？協の？」

「はい。えっと、あの……。」

どういう事なのか確認をとろうとするが董卓は何か困ったように賈馱の方を向く。

「簡単に言つとあんたは強いから引き込めてことよ。まあ、陛下は褒めていたけど、

たった40余りでしょ。ふんっ！呂布や張遼ならもっと多くても倒せるわ！」

なぜか自慢気に賈馱が話す。

「ならいらねえだろ。じゃあな。」

再度踵を返すと一人の武将が俺の前に立ちはだかり、さらにもう一人その横に立つ。

「そう早合点しいなや、こっからが本題やねんから。」

「お前らは？」

「うちは張遼、字は文遠。よろしゅうな。」

「わたしは華雄。さあ、賈馱の話聞いてもらおう。」

どうやら二人とも俺を通すつもりはないようだ。

「はあ。……なら、さっさと見え。」

溜息を吐き賈馱を見る。

「簡単な事、要は腕試しね。その二人どちらかと戦ってもらおうわ。」

「断る。」

「へ？」

俺の即答した答えに理解が追いつかないのか賈馱が間の抜けた声を出す。

「なんでそんな面倒な事をせにゃならん。それに俺は誰の下にも付く気はない。」

戦なんぞテメエらで勝手にやれ、将が足りない？知った事か。」

そう言い捨てて出口へ向かう。

「ちょっと待ちい！」

「待て！」

張遼と華雄が止めようと手を伸ばす。が、服に触るより前に高速移動する。

「「なっ！」」

俺の姿を見失った二人が驚きの声を上げる。それを出口の扉前で見つつ話す。

「一つ言っただけ。俺は別に董卓が嫌いなのじゃなく、むしろ好きな部類に入る。」

無論、賈馮もだ。儂げな美少女にちょっと気の強い美少女だからな。

それに、

？陽での生活もそれなりに気に入っている。

だが、さっきも言ったように誰の下にも付く気はない。

俺は俺のやり方でやりたいようにやる。それだけは憶えておけ。」

そう言って扉から出る。

そして、城から出てしばらくしてから呟く。

「反董卓連合か、どっやって引ッ掻き回してやるかな。」

6 (後書き)

あれ？今回で董卓軍に入れるつもりだったのに……断っちゃいました。

おかしいです。構想と違います。これからどうしましょう。

アスさま

青青葉さま

とらぶぐさま

感想ありがとうございます。

そして、読んでくれた方。感謝。

7 (前書き)

酔いと眠さを我慢して書きました。見直しもしてません。
かなりのダメダメさが出ているかもしれません。
それでも読んでくれる方。感謝。

広間での勧誘から早数ヶ月。まだ？陽に逗留している？徳です。

反董卓連合も生まれそろそろ連合軍が？水関に集まる頃合だろうか。董卓軍も張遼と華雄を？水関へ、呂布と陳宮を虎牢関へと送り出していた。

何気に張遼が？水関へ行っているのは猪を抑えるためだろう。

「さて、行くか。」

黒帝に乗り？陽の街を出て？水関へと走り出す。黒帝の速さなら戦闘開始前に着くことが出来るだろう。

虎牢関を一閃着あったが通過し？水関を目指す。？水関に着くと黒帝を降りて

気配を消し関の上に移動する。そこから見える連合軍。

「こりやすげえな。およそ十五万つてところか。旗を見るに袁紹、袁術、曹操、孫策、

公孫賛、そして西涼の馬騰いや马超か。その他は有象無象かな。」

なんとか戦闘開始前に到着出来たみたいだ。

はてさて、この後どうなるか見物だな。

「離せ張遼！あれほど虚仮にされて、黙っていることなど私には出来ん！」

「んあ？寝ちまったか。」

離れたところからの大声で目が覚めた。どうやら寝てしまっていたらしい。

「あれは華雄と張遼か？」

なにやら言い争っている様だ。

「なにやってんだ？」

関の外を見ると武将と思われる人物が二人いる。多分関羽と張飛だろ。

関の外から華雄を挑発したみたいだ。

華雄は地団駄踏みつつも張遼に宥められている。

「お？また誰か部隊を率いて出てきたぞ。あれは………孫策か。」

自分の母、孫文台の事をだし華雄を挑発する孫策。

案の定激昂する華雄だが、まだ張遼に抑えられている。すると孫策の軍が無造作に城門へよって来る。

これには華雄のみならず兵たちも我慢ならなかったみたいで直談判している。

「我らが臆病者などでは無いと言う事を天下に示そうではないか！」

「応ーっ！」

「全軍出撃の準備」はい、そこまで。「誰だっ！」

号令を出そうとしていた華雄の言葉を遮って止める。

「よう、おひさしー。」

「「？徳！」」

突然の俺の登場に張遼と華雄の両名が俺の名を呼ぶ。あれ、俺名乗ったっけ？

まあ、董卓か賈馱に聞いたんだろう。

「貴様！なぜここにいる！」

「助かったで？徳。で、なんでここにおるん？」

対照的な二人の態度に呆れながら話す。

「本当は気付かれないよう黙って見物するつもりだったんだがな。どっかの馬鹿が

挑発に乗って出て行こうとしてたから出てきたんだよ。」

「馬鹿とは何だ！」

憤る華雄に冷たい視線を向ける。

「お前に決まってるだろ。お前は何のためにここにいる。挑発に乗って兵を殺すためか、

打って出て自己満足に浸るためか？」

「違う！」

「どこが違う。挑発で熱くなった頭で何が考えられる？何が見える？関に籠もり長期戦に持ち込めば被害も少なく勝てる戦だ。なぜ打って出ていたずらに

兵の命を散らす。連合はこちらの倍以上いるんだぞ。」

「ふん！いくら多かろうと烏合の衆、この程度の差など蹴散らしてくれる！」

「客観的に見て連合の兵の錬度は高い。まあ例外は多々いるけどな。その例外以外の兵はこちらとほぼ同等。質は同じくらいなのに数は向こうが上、どうやって蹴散らす。烏合の衆とはほど遠いぞ？」

「うぬぬ。」

返す言葉がないのか唸る華雄。それを見ていると張遼が話し掛けた。

「いやー、助かったで。ウチじゃあもう止められへんかったからな。」

「なに、構わんよ。こつちとしてもここで打って出られては困るからな。」

「どじいじいとやっ？」

「こつちのことだ。それより……貴様どこへ行く。」

無言で関を降りて行くこととする華雄に近づき襟首を掴む。

「は、離せ！あれほど我が武を愚弄されて黙っていられるかっ！」

「そつです！あんな戯言いますぐ吐けなくしてやりましょう！」

「我らは最早限界です！あのような謂れのない罵倒など奴らの息の根と共に

止めてしましましょう！」

華雄の言葉に触発されたのか兵たちも煽ってくる。が、

「お前らちよつと黙れ。」

俺の威圧を込めた一言で沈静する。

「さて華雄。ちよつと O・H A・N A・S I しようか。」

俺は黒い笑顔でガクブルしている華雄を引きずって行く。

暫らく経って帰ってきた華雄は真っ白に燃え尽きていた。時々咳く言葉は、

「ごめんなさい」「もうしません」「許してください」。

そんな様子を見た張遼と兵達は？徳には逆らわない方が身の為だと思っただけらしい。

「さて。」

華雄に O・H A・N A・S I し終わってから気をとり直してから、言葉を発した瞬間
ビクツと張遼や兵たちが身を震わせた。

「ん？どうしたんだ？」

疑問に思っ て問いかけると、全員で声をそろえて「なんでもありません。」と返ってきた。
疑問に思ったがとりあえず置いておく。

「なあ、張遼。」

「な、なんや？」

「華雄は挑発されたんだよな。」

「そやけど、どうしたん？」

「なら、ちよつと仕返してやるっぜ。」

ニヤツと笑って張遼を見る。すぐに合点がいったのか張遼も笑っている。

「ええなそれ。せやけど、どうやって仕返してるんや？」

「考えがある。まあ任せな。」

クッククックと晒しながら関の上に立つ。そんな俺を見ながら張遼
がちよっと引いていた
が俺は気付かなかつた。

7 (後書き)

投稿したら寝ます。お目汚し申し訳ありませんでした。
読んでくれた方。感謝。

偽者さま

感想ありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5449n/>

外史に転生した男がいたようです。

2010年10月11日00時26分発行